

社会学の立場から

徳野 貞雄

村研究の四〇年—戦後日本農村の四〇年の変貌—を跡付け、今後の村落社会の展望を如何切開かと言った壮大な報告はとてもできない。ただ、学説研究や理論研究を怠ってはいるが、九州・中国の農山村を飛び回っている現場研究者として、現在の農村社会学に対する想いを報告させていただく。

まず、現在の日本の農業・農村の課題を直視する必要があると思う。確かに、村落共同体の歴史的展開や、現在の政治経済支配下における農業・農村の位置づけ、さらに、海外農村の実態解明などは、重要なテーマであることは明白である。しかし、現在の急激に変貌しつつある日本の農村社会の具体的動向を把握する作業は、何よりも急務の課題であると思われる。

従来より、村落は何程かの構造的まとまりを持ち、研究者はその構造的特質をさまざまな角度から明らかにしてきた。また、高度成長期以降の農村の変質を、構造的なまとまりの解体過程として捉えてきた。すなわち、村落の何程かのまとまりを前提として、農村を研究してきた。報告者は、この前提は、現在でも有効であると同時に、研究上の桎梏ともなりつつのではないかと考えている。

現代の農村は、ある側面から見れば、就業構成上、農業経営上、生活圈の範囲、世代間の生活様式さらには地域意識など、多層かつ

複合的な構成をなしている。確かに、農地所有や農業生産上の組織、地域生活上の組織構成において、イエを軸にした村落的まとまりは存在する。と同時に、個人レベルにおける生活構造の在り方は、きわめて多様化していると言わざるを得ない。

現在の農村社会の具体的実態を把握するためには、地域に住み暮らす人々の個人レベルもしくは、個人をベースにした様々な社会的属性や活動を明らかにする必要がある。すなわち、研究分析の単位を、イエ等の集団的なものから、個人レベルにシフトした研究も重要になってくる。

右のシフトは、現在の農業の扱い手問題のみならず、地域社会の扱い手問題と直結していく課題である。昭和三〇年代以前の様に、農地所有面積や家格等によって、農業後継者や地域の扱い手層が決定される訳でなく、現代の高度産業社会の枠組に規定された個人レベルでの行動選択が強まってきている。

現在の農村は、扱い手問題を軸に、将来の地域社会のあり方に不安を持っている。農林業生産力論的なアプローチだけでは解決のつかない状況の中で、社会学的アプローチ的重要性が増してきている。従来のオーソライズされた農村社会学のベースペクティブのみならず、他領域の社会学とも連携した、現代的パークスベクティブを構築していく必要がある。そのための試論的報告とした。

(広島県立大学)